

トピックス
1. 金婚式を迎へて
2. 春分～清明の頃



福留経営労務管理事務所  
 姫路龍馬会  
 社会保険労務士・行政書士  
 福留章

<h1>龍馬通信</h1>	No. 28
	2020年4月号

「コロナ撲滅」 <sup>しゅんぶん</sup> 春分 <sup>せいめい</sup> ～清明の頃

3月10日を過ぎる頃から朝5時55分に家を出る時、首にぶらさげていたLED灯が不要になり同じ様にネックウォーマーがいなくなった。

春分。夜と昼の長さがほぼ同じになりこれからは昼の時間が長くなる。春めくから春本番に。桜前線が北上を始める。人は日の光を浴びる事で心も体も軽くなり、次々に繰り広げられる花の饗宴にウキウキとして身を委ねる。科学的にみると気持ちを安定させる脳内物質セロトニンが日光を浴びる事によって盛んになるらしいのです。

そんな好季節にもかかわらず、日本中がいや世界中が憂うつの中にあります。まるで晴黒の雲に覆われて窒息してしまいそうです。経済も文化もスポーツも停滞して心の中がどんよりとした空気に包まれたままです。



「コロナ撲滅」と叫んでみても大自然の狂気の前に人類はかくも弱いものであるかを痛感させられます。本当に世の中うまくいかないことが多いです。季節はそんな人々の嘆きとは無関係に、弥生から卯月へと移ろいます。

清明。すべてが清々として、空も風も輝く季節です。南の国から渡り鳥が次々と飛来し、恋と子育ての時空が広がります。花は咲き鳥は歌い緑は日一日と濃くなっていきます。

別離と出会いの季節でもありました。今年は寂しいささやかな式典すらできなかったのが残念ですね。一生に一度の晴れ舞台でもあったのに。せめて「コロナ撲滅」と叫ばなくてもよいように一日も早くウイルス禍が収束しますように。

4月8日はお釈迦様の誕生日。今年は特に念入りに甘茶をかけて祈りましょうか…。

※春分 3月21日頃。

※清明 4月5日頃。

随筆 『龍馬と私』 ～ 龍馬脱藩への道 ～

土佐勤王党の結成には2つの契機があった。龍馬が2度目の剣術修行から帰国したのは安政5年（1858年）9月6日。龍馬24歳。3年後の文久元年（1861年）事件は起きた。3月3日高知城の西、井口村の永福寺門前。桃の節句で酒に酔った上士の山田広衛と益永繁斎が郷土の中平忠次郎と宇賀喜久馬とすれちがいざまに「肩が触



れた」「触れぬ」で口論。山田が中平を斬ってしまった。これを知った中平の兄池田寅之助が現場にかけつけ川で刀を洗っていた山田と益永を斬殺した。山田家には上士が池田家には郷土達が集結し一触即発の状態となった。結局、池田と宇賀が播命により切腹。一件落ち着いたかに見えたがこれが郷土達の結束を高め土佐勤王党結成の下地となった。山内家の入封移来、綿々と続いてきた階級差別の激しい上士・下士

とりわけ上士と郷土の間にくすぶっていた軋轢<sup>あつれき</sup>が一挙に噴き出した事件であった。

もう1つの要因は藩生山内容堂の処罰だった。一橋派の重鎮であった容堂は、いわゆる安政の大獄により隠居となり山内豊範が藩主に。容堂は更に謹慎処分となる。万延元年（1860年）に井伊直弼が暗殺され、謹慎は解かれたが土佐への帰国は許されず、土佐国内では幕府への不信感が募っていた。前藩主容堂の身を自由にする事を幕府に求めるという気運も高まっていた。

土佐勤王党を結成したのは、長岡郡仁井田郷吹井村の郷土（白札）武市半平太。龍馬とは遠い親戚関係にあたる。事件が起った年に江戸で結成。

長州の久坂玄瑞、薩摩の樺山三円らと提携して兵を連れての上京を計画。西南雄藩尊攘派の申し合わせにより「王政復古」を目指した。公武合体路線にある土佐藩を藩ぐるみ（特に藩主や上士）勤皇一色に染めかえようとするところに特色があった。

9月25日武市が江戸から戻るや龍馬は面談し9番目に血判して勤王党に加わる。因に、中岡慎太郎は13番目の血判。冬頃までに192名が加盟した。

龍馬脱藩への道はこうしてその第一歩を踏み出すことになった。

## 「金婚式を迎えて」



何よりも夫婦そろって金婚式を迎える事に大きな喜びを感じます。昭和46年11月3日、家内の誕生日に挙式した。とは言っても大学を出たばかりの私に財力がなく二人が勤めていた会社の上司を仲人にして自宅での極めてささやかな結婚式だった。

その後、家内の実家である青森県下北郡大字大佐井字佐井へ出向き両親とその親戚に挨拶し、さらにその後、高知へ帰って友人を集めての披露をした。一度も花嫁衣裳を着せてやれなかった事が後悔される。写真だけはさらにその後に部下の結婚式の仲人をした時に合わせて撮ったものが残っている。

以来50年。半世紀にわたる夫婦としての道は波乱万丈という訳ではないけれど、それなりの波風に翻弄され、浮いたり沈んだりの人生航路であった。

一言で言えば、今日私があるのは家内の献身のおかげだと思います。私の事や子供達の事を優先し、すべての面で自分を後におく。少々のグチは言ってもそれ以上ではないし、大切な所では私よりもむしろ体を張って難問を解決してくれた。

私はわがまま勝手をおし通し、更には無理難題で家内を苦しめた。家内はひたすら私に尽くすことだけを考え、気嫌よく仕事ができるよう配慮してくれた。

朝一番に起きて私達の面倒をみる。朝5時55分玄関にウォーキングシューズがそろえられている。8時15分頃事務所に入る時には、玄関があげられ部屋の空調も入っている。一日もかかした事のない晩酌の為に酒の用意し肴を整える。そんな毎日の中で、最早や空気の如く、なくてはならず、いなければ何もできない。

2年前の冬、大腿骨骨折で1カ月の入院を余儀なくされた時の家族の困りようは半端ではなかった。私より4つ歳上の家内も流石に75歳を越え、年々体力は劣えつつあるようだ。

歳下の私は生涯現役を目指して、とにかく健康第一に日々を暮らしている。今でも私の仕事を支えてくれている一番は家内だ。正式には今年の11月3日に50回目の結婚記念日を迎える事になる。その前に高砂市でお祝いの会があるようだ。2人してその催しに参列することを楽しみにしている。

金婚式を迎えた今年。WHOはパンデミック（世界的大感染）を宣言したが、健康には留意して2人そろって元気に「記念すべき年」を過ごしたいと思う。

